- 11 マレーシア, サラワク州産ニクバエの1新種
○倉橋弘¹⁾, MU. Leh²⁾. ¹⁾国立感染症研究所昆虫医
科学部, ²⁾サラワク博物館). A new species of
sarcophagid fly from Sarawak, Malaysia. Kurahashi, H. and
Leh, M. U.

2005年・2006年に実施した「東マレーシア, サラワク州の双
翅類昆虫の分類・生態学的研究」の野外調査で採取されたニク
バエ科標本を調べた結果, 10属21種を同定した. このうちナ
ミニクバエ属 *Parasarcophaga* の1種が新種であることが半明
した. 本種はフィリピンのパラワン島から Sugiyama (1990)が
記載した *Parasarcophaga montiblensis* と Senior-White
(1927)がスリランカより記載した *P. scopariiformis* に外部形
態が酷似するが, オスの外部生殖器, 特に Juxta 部分が側面よ
り見たときに特徴的である. 本種はクチン郊外にある 1000 m
級の山の山麓部に流れる溪流沿いで 14 個体 (雄) が採取され
た. 上記既知種 2 種がマレーシアでは海岸のマングローブ地帯
で採取されるのとは対照的である.

- 13 イヨシロオビアブの駆除依頼とその対応.
○渡辺 護¹⁾, 山内健生²⁾ (1) 国立感染症研・昆虫医科
学, ²⁾富山衛研) Anti-bloodsucking measure against
ororo-tabanidfly, *Hirosia iyoensis* by the trapping methods.
Watanabe, M. and Yamauchi, T.

イヨシロオビアブは日本海側の多雪地帯において発生が顕著
で, 以前から治山治水などの土木工事現場で吸血被害がみられ
ていた. 近年, リゾート開発などで山間地の利用, イベント開催
などで本種の駆除の要望が相次ぐようになった. しかし, イヨシ
ロオビアブの生息地は山間地の自然豊かな地域で, しかも幼虫
は森林床の腐葉土や苔の中で小動物を食べて生活し, 発生数
を激減させる様な駆除は困難である. 演者は相談者に駆除の難
しさを説明する一方で, 成虫の誘引捕獲による「吸血被害を軽
減する方法」は可能であることを伝えている. そんな中, 本年 8
月 18 日のイヨシロオビアブの多発生時期に, 砂防ダム河川敷
においてイベントの開催が計画され, 「吸血被害の阻止」を相談
された. その対応・対策を中心にして報告する.

吸血被害の阻止は二酸化炭素誘引のキャノピトラップを用
いることを考え, 先ず, イベント会場になる河川敷におけるイ
ヨシロオビアブの発生状況を知るために, イベント 10 日前の 8
月 9 日にトラップ 4 台による事前調査を行った. その結果と会場
の面積から, トラップを 14 台配置することと, イベント当日
のみでは十分にイヨシロオビアブを捕獲出来ないと考え, 2 日
前 (16 日) から連続捕獲を行うこととした. その結果, 16, 17
日の両日で合計約 3000 個体を捕獲, 開催当日は約 500 個体が
捕獲され, 開催本部・救護所への吸血被害の報告は無かった.

- 12 河川より大量発生するトビケラ類の発生動態とその
防除 - 飛来成虫の季節消長に注目して -.

○木村悟朗, 井上栄壮, 平林公男 (信州大学 繊維学部
応用生物科学科). Massive flights of caddisflies
(Trichoptera) and plans for their control in Chikuma
River: Seasonal change of adult caddisflies. Kimura,
G., Inoue, E. and Hirabayashi, K.

河川産水生昆虫の主要構成員の一つであるトビケラ類は気管
支喘息のアレルゲンとなることが知られている. 我々のこれま
での調査結果から, 千曲川中流域にはトビケラ類が高密度で生
息することが明らかとなっている. 本研究では, 千曲川中流域
におけるトビケラ成虫相とその季節変化を把握することを目的
に, 2006 年 3 月 28 日から 12 月 1 日までの間, 毎日同一時刻,
同一自動販売機に飛来するトビケラ成虫を調査した.

調査期間中, 合計 2,926 匹, 15 種のトビケラ成虫が得られた.
トビケラ成虫は 5 月 1 日に初捕獲され, 9 月 2 日には期間中最
大の 272 匹が捕獲された. 成虫の捕獲は 11 月 10 日まで続いた.
優占種はウルマーダトビケラであり, 全体の 82.9% を占めた.
次いでウルマーシマトビケラの 5.8% であった. 本研究では, ア
レルゲンとして報告のあるオオシマトビケラは捕獲されなかつ
たが, 同じシマトビケラ科のウルマーシマトビケラに加え, ナ
カハラシマトビケラ, コガタシマトビケラ, ナミコガタシマ
トビケラ, およびエチゴシマトビケラの 5 種が捕獲された.

- 14 コナヒョウヒダニの排泄物由来アレルゲン Der f 1 の
安定性の評価
○稲田貴嗣, 竹田茂 (神奈川県衛生研究所). Stability
of Der f 1 yielded from *Dermatophagoides farinae*
Inada, T. and Takeda S.

ヒョウヒダニが屋内に排出したアレルゲンは徐々にアレルゲ
ン性を失うのか, その安定性は明らかでない. そこでコナヒョ
ウヒダニを個別に飼育して, 排出されたダニアレルゲン (Der f
1) 量を測定し, ついで Der f 1 の活性が時間の経過によってど
のように変化するかを試験した.

飼育室 (25°C, 65% R.H., 24D) に置いたガラス管内で成虫
を 2 週間飼育後, ダニの糞を餌とともにガラス管内から取り出
した. ダニの糞が蓄積された餌を, 雌雄別に 3-13 匹分を 1 サ
ンプルとしてシャーレに集め, ダニを取り除いた後, 餌が飛散し
ないようにシャーレにナイロン布でフタをして, 飼育室に一定
期間 (1 ヶ月, 3 ヶ月, 6 ヶ月) 放置した.

コナヒョウヒダニのオスが生産した Der f 1 は糞採集直後の
試料 (0.37ng/匹/日), 1 ヶ月後の試料 (0.34ng/匹/日), 3 ヶ月
後の試料 (0.32ng/匹/日), 6 ヶ月後の試料 (0.28ng/匹/日) で
有意な差はなく, 時間経過にともなうアレルゲン活性の減少は
見られなかった. 一方, メスでは 3 ヶ月後の試料 (0.16ng/匹/
日) が糞採集直後 (0.28ng/匹/日) および 1 ヶ月経過後の試料
(0.22ng/匹/日) よりも Der f 1 量が少なく, 有意な差が見ら
れた. しかし 6 ヶ月経過した試料 (0.18ng/匹/日) では他の試
料と有意な差は無く, メスでも Der f 1 のアレルゲン活性は 6
ヶ月間失われないものと考えられた.